

万葉集卷十・二二三四「しぐれ降る見ゆ」について

上 森 鉄 也

□ 要 旨

万葉集卷十・二二三四の歌の第五句「しぐれ降る見ゆ」の原文は「為暮零礼見」で、シグレフレミムと訓まれているが、略解が「礼」を「所」の誤りとしてシグレフルミユと訓んだ。そして、近年は「しぐれ降れ見む」では歌意を得難いなどの理由から、「しぐれ降る見ゆ」とする注釈書が多いが、誤字説をとらない注釈書もあり定まっていない。歌意を得難いというのは、なぜ妹があたりにしぐれが降るのを望むのか、なぜそれを見ようと思うのかが明解でないということであろう。しかし、この歌の場合、しぐれが降るのを見ると解釈するのではなく、見るのは妹の姿であるとしたい。つまり、妹の姿を隠すものを除外してほしいと

願っているのであって、妹の姿を隠しているのは黄葉であるとする。そして、しぐれが降ることにより、それを散らせてしまっしてほしいといっているのである。そのために「妹があたりに」としぐれが降る場所を限定しているのである。

□ キーワード

二二三四 しぐれ 時雨 黄葉 略体歌

万葉集の卷十・二三四に次のような歌がある。¹⁾

一日にも千重にしくしく我が恋ふる妹があたりにしぐれ降

る見ゆ

この歌の第五句「しぐれ降る見ゆ」の原文は「為暮零礼見」とあり、シグレフレミムと訓まれていた。しかし、略解が「礼」を「所」の誤りとしてシグレフルミュと訓んだ。そして「しぐれ降れ見む」では「歌意を得難く」（新編古典全集）『見ゆ』が命令形を受けた例はない」（新古典大系）などとして、近年の注釈書は略解の誤字説を支持し、「しぐれ降る見ゆ」とするものが多い。ただし、全注や和歌文学大系などは「為暮零礼見」としており定まっていはいない。

また、「しぐれ降る見ゆ」ならば歌意を得やすいといえるかという点、古典全集は「雨に降りこめられて恋人の所へ逢いに行けない男の歌」と解釈しているが、全注は「通り雨を本性とする『しぐれ』の場合、如何であろうか」と批判し、恋しい気持ちが強ければ、しぐれが障害になるとは思えないと述べている。

「しぐれ降れ見む」では歌意を得難いというのは、妹があた

りに降るしぐれが見たいのでしぐれよ降れ、というのでは、なぜそれが見たいのか理解しにくいことであろう。しかし「しぐれ降る見ゆ」でも、なぜしぐれが降るのを見るのか、なぜ「妹があたりに」と限定するのかなどの疑問が残ると思われるのである。

本稿では、この歌の第五句について、原文を「為暮零礼見」とし「しぐれ降れ見む」とするべきか、やはり「為暮零所見」の誤写であって「しぐれ降る見ゆ」とするべきかを検討するとともに、歌の意図について考察してみたい。

二

諸注釈書における第五句の訓については、原文を「為暮零礼見」とするか「為暮零所見」とするかによって二つに分かれている。

A 為暮零礼見 しぐれふれみむ…代匠記、万葉考、全釈、

窪田評釈、古典全書、全

註釈、佐々木評釈、私注、

古典大系、注釈、講談社

文庫、全注、和歌文学大

系

B 為暮零所見 しぐれふるみゆ…略解、古義、新考、古典

全集、古典集成、新編古典全集、
釈注、新古典大系

A 説は、原文「為暮零礼見」が諸本に異同がないことを重視し、旧訓に従ったものであると考えられる。これに対してB説は、略解が「禮は所の誤にて、しぐれふるみゆなるべし」としたことを支持したものであるが、その理由は次の通りである。

原文、底本「為暮零礼見」とあり、シグレフレミムと読むこともできるが、内容の上から推して「礼」の字を「所」の誤りとしシグレ降ル見ユと読む『万葉集略解』の説に従う。(古典全集)

原文に「為暮零礼見」とあり、旧訓はシグレフレミムであった。それでは歌意を得難く、「礼」を「所」の誤りとし「所見」をミユと読んでシグレ降ル見ユと解する『万葉集略解』の説に従う。(新編古典全集)

原文は諸本「為暮零礼見」とあり、「しぐれふれみむ」と訓まれるが、「見ゆ」が命令形を受けた例はない。また、「降る」の語尾を「礼」と表記することも異様である。「礼見」を「所見」の誤りとする略解の説に従って、「見ゆ」と訓む。(新古典大系)

まず、新古典大系が「見ゆ」が命令形を受けた例はないと述べているが、「見む」が命令形を受ける形になっている歌は、

夕闇は道たづたづし月待ちていませ我が背子その間にも見む
(巻四・七〇九)

白崎は幸くあり待て大船にま梶しじ貫きまたかへり見む

(巻九・一六六八)

隠りのみ恋ふれば苦しなでしこが花に咲き出よ朝な朝な見む
(巻十・一九九二)

などがある。また、「降る」の語尾を「礼」と表記することも異様であると述べているが、「礼」がレの仮名文字として用いられている例は多く、動詞の命令形の活用語尾を表記したものである。

直に逢はば逢ひかつましじ石川に雲立渡礼へくもたちわたれ見つつ偲はむ
(巻二・二二五)

否と言へど話れく常へかたれかたれと詔らせこそ志斐いは奏せ強語りと言ふ
(巻三・二二七)

仏造るま朱足らずは水溜まる池田の朝臣が鼻上乎穿礼へはなのうえをほれ
(巻十六・三八四一)

いづくにそま朱掘る岡薦豊平群の朝臣が鼻上乎穿礼へはなのうえをほれ
(巻十六・三八四三)

ただし、第五句を「為暮零礼見」とした場合の二三四の本

文は次の通りであり、また左注に人麻呂歌集の歌であることを記している。

一日 千重敷布 我恋 妹当 為暮零礼見
右一首、柿本朝臣人麻呂之歌集出。

つまり、新古典大系が異様と述べているのは、二二三四を人麻呂歌集の略体歌と考えた上でのことであると考えられる。確かに略体歌であるならば、表記上「礼」を「降る」の語尾とするのは異例と思われるが、この問題については後で述べることにする。

注釈書を見ると、古典全集がB説をとったあと、古典集成、新編古典全集、釈注、新古典大系が従っていることになる。それは、古典全集では「内容の上から推して」とあるが、つまりは「しぐれ降れ見む」では歌意を得難いということを支持したものと考えられる。また、「しぐれ降れ見む」とする注釈書は、いずれも「降れ」を命令形と考えており、たとえば、注釈はこの歌の口語訳を、

一日の間に何度も何度もしぐりに私が心惹かれてゐる妹の家のあたりにしぐれよ零れ。私はそれを見よう。

としている。しかし、恋い慕う女性の家のあたりに降るしぐれを何故見ようと思うのか。その理由が判然としない。

これに対して、古典全集は口語訳を

万葉集卷十・二二三四「しぐれ降る見ゆ」について（上森）

一日に 何度も何度も わたしが恋い慕うあの娘の家のあたりに 時雨が降るのが見える

として、「雨に降りこめられて恋人の所へ逢いに行けない男の歌」と解釈した。

ただし、講談社文庫、全注、和歌文学大系は本文を「為暮零礼見」に戻しており、全注は次のように述べている。

「雨に降りこめられて恋人のところへ逢いに行けない男の歌」（古典全集）のように解する説もあるが、通り雨を本性とする「しぐれ」の場合、如何であろうか。続く歌群には「玉だすきかけぬ時なし我が恋はしぐれし降らば濡れつつも行かむ」（二三三六）の歌もある。「しぐれ降れ見む」と、原文のままに解し、逢いに行きたくとも人目をはばかり行くことのできない男が、しぐれが降れば、それを口実に妻の家のあたりを見ることができるとして詠んだ歌、とした方が自然ではないかと思う。

また、和歌文学大系は「略解に礼を所の誤字としシグレフルミュとしたが誤字説なのが難」とし、「この一首は、雨を詠じた歌として、特長があり、結句のシグレフレ・ミュといふ調べも保存して置きたいとおもふ」と斎藤評釈を引いている。

雨が降っているで恋い慕う女性のところに逢いに行けず、彼女の家のあたりにしぐれが降るのを見ているしかないことを

嘆く歌という古典全集の解釈は、理解しやすいものの全注が批判しているように、しぐれが恋人のところに行けないほどの障害となるだろうかという疑問が残る。しかし、全注のしぐれを口実に恋人の家のあたりを見ろという解釈は、しぐれが降る風景が見るに値するものであったという前提が必要となる。また、和歌文学大系が引く齋藤茂吉の評も「しぐれ降れ見む」では歌の意味が判然としないという問題を解決するものではないだろう。

このように、「しぐれ降れ見む」「しぐれ降る見ゆ」はともに問題があることになるのである。

三

二二三四の歌の第五句の問題は、「しぐれ降れ見む」では何故しぐれが降ることを望むのか、そしてその様を見たいのかが判然としないということであるが、それを理由に誤字説をとってよいかということであろう。

二二三四の歌については、山本堅太郎氏の詳細な考察があり、第五句の誤字説については、

この説の問題点は、「礼」を「所」に改めるべき文献的徴

証が見出されないことである。先にふれたように「礼」に

は諸本とも異同がない。また「礼」と「所」の草体は似ていないので、誤写の可能性も低い。

と述べられ、「しぐれ降れ見む」がどうしても成立しないと判明したとき、はじめて「しぐれ降る見ゆ」をとり上げるべきなのであるとされている。

しぐれが降るのを見る理由については、「しぐれ降れ見む」と読む注釈書も、さまざまな解釈をしている。

何となくそなたをながめば人の見とがむべければ、しぐれのふらばもみちしつゝや散つるやなど事よせてやすく見やりだにせむとよめる歎（代匠記精撰本）

妹かあたりに時雨ふれよ、吾も行ふれて見むと也（万葉考）
妹が家のあたりに、時雨でも降らば、それを眺めようというのが、奇警である。なつかしく何かにつけてその方を見たいと思う心、そなたの空を眺めている心が寫されている。（全注釈）

時雨の降るにつけても、なつかしみ見ようといふのは、雨に対する感覚が、吾々とは幾分異なつたものと見える。

（私注）

時雨をわが息と見てわが妹をわが息に包みたい意。霧・雲も同様、（講談社文庫）

万葉考は、しぐれが降るのを二人で見たいのであるとし、全

註釈は、しぐれが降っているのを理由にして恋人の家のあたりを見ようという解釈であるが、いずれも私注が述べているように、雨に対する感覚が現代人とは異なると言わざるを得ず、しぐれが降るのを見る理由を説明できているとはいえないだろう。ただ代匠記が、しぐれが降れば紅葉するか、散ってしまうかと心配するのを理由に恋人のいるあたりを見ようと詠んだのかと述べているのは、しぐれが降るのを見る理由の説明といえる。しかし、山本氏は、

「他人が見咎める」「黄葉」など歌にない設定をもち込むのは穩当でないし、時雨でなく「ソナタ」（妹があたり）を見る歌のように解しているのも、文脈からはうなずけない。

と批判し、講談社文庫については、霧の例はあるとしながらも、時雨が息を象徴すると見られる例が集中では他にないことが、この説の弱点となっている。時雨と息との象徴的結合は、万葉歌一般には見ることができない。

と述べて、二二三四を要するに明解を得ない歌だったのであるとしている。そして、その理由を、「降れ」を命令形と解して疑わなかったことにあるのであって、「降れ」は已然形と考えるべきではないかと述べられた。

山本氏は、上代の文献には、動詞の已然形が接続助詞バ・ド・

万葉集卷十・二二三四「しぐれ降る見ゆ」について（上森）

ドモを伴わないまま、条件句として後句に接続する用法が見られることを指摘され、二二三四の歌を、

一日には千重しくしくに我が恋ふる妹があたりはしぐれ降れ見む

と訓まれた。そして、結句は「時雨が降ってはいるけれど、見たい」という意味になるとされ、見る対象はしぐれではなく「妹があたり」であると考えられた。つまり、しぐれが降っているけれど、外出をして見晴らしのよい場所に出で立ち、妹があたりを見るという歌であると解されたのである。

山本氏の説は、「降れ」を命令形ではなく「已然形接続」と考えることにより、不自然な句割れが解消されるという利点もある。しかし、雨に濡れてまで外出しながら、妹のもとへは行かず、妹のあたりを眺めるだけというのは矛盾しているのではないだろうか。

恋のためなら雨をも厭わぬと詠んだ歌には、全注があげている二二三六の他に次のようなものがある。

石上降るとも雨につつまめや妹に逢はむと言ひてしものを
（卷四・六六四）

男神に雲立ち登りしぐれ降り濡れ通るとも我帰らめや

（卷九・一七六〇）

我が背子が使ひを待つと笠も着ず出でつつそ見し雨の降ら

くに

(卷十二・三二二)

心なき雨にもあるか人目守る乏しき妹に今日だに逢はむを

(卷十二・三二二)

右一首

ひさかたの雨の降る日を我が門に葦笠着すて来る人や誰

(卷十二・三二二)

卷向の穴師の山に雲居つつ雨は降れども濡れつつそ来し

(卷十二・三二二)

右一首

三二二・三二二は、笠もつけずに外で濡れながら恋人の
使いを待ち侘びている女性に対して、雨に妨げられて行けない
と弁解している男性の歌であるが、このような歌もあるもの、
雨が障害になるとはいえ、恋人に逢うためなら濡れてでも行く
という歌もあるのである。まして、二二三四の場合は、全注が
指摘しているように通り雨を本性とするしぐれなのである。恋
人を慕い、しぐれが降っているにもかかわらず家を出たのであ
れば、そのまま恋人のもとへ逢いに行くというのが自然であ
ろう。

この点については山本氏も、六六四・二二三六・三二二六の
歌を見れば明らかのように、雨を侵してまでも外出するのは、
じかに恋人に逢わんがためである。このことを換言すれば「時

雨(雨)」という厄介な状況に対しては、「じかに逢う」とい
くらしい強いモチーフでなくては、表現として拮抗し得ない、
ということになる。逢えもしないのに(もしくは逢いにも行か
ないで)どうしてわざわざ雨の中を「見」に行くのか、という
疑問が当然生じると述べられている。しかし、「一日には千重
しくしくにあが恋ふる」という修飾句は、モチーフの個人的な
必然性(なぜ「見る」のか)を説明し、公にする役割を果たし
ている。そのような釈明を背負うことによって、「妹があたり」
は、それほどにも恋しい、他ならぬ愛人の居る場所として強く
印象づけられる。以上の文脈を受けるのならば、「時雨」の中
を出で立って「見る」ことは、やむにやまれぬ恋心のなせるわ
ざとして、「じかに逢う」以上に激しい行為であるかに感じら
れてくるであろうとされた。

確かに、逢えぬ恋人を思っ雨の中をたたずむという表現は
現代ではみられる。たとえば、失恋した人物が雨の中、傘もさ
さずに濡れながら歩くというのは、映画やドラマなどでは常用
されている演出である。問題は万葉歌にそのような表現が他に
みられないことであろう。

この雨と逢えぬ恋人への心情の関係というのは、第五句を
「しぐれ降る見ゆ」とした場合にも問題となると思われる。

四

第五句を「しぐれ降れ見む」とした場合の問題は、何故しぐれが降ることを望むのか、何故その様を見たいのかが判然としないということであったが、「しぐれ降る見ゆ」ならば、明解な歌といえるであろうか。

釈注は、

上二句や結句など、『万葉集』全体から見れば、常套表現にすぎないけれども、読み通す時、しめやかな情緒の漂うのが不思議。いとしい人に逢えない心情に、時雨のわびしさが調和するからであろう。

と述べているが、雨とわびしさの関係を示していると思われる歌に次のようなものがある。

和銅五年壬子の夏四月、長田王を伊勢の斎宮に遣はず

時に、山辺の御井にして作る歌

山辺の御井を見がてり神風の伊勢娘ども相見つるかも

(巻一・八一)

うらさぶる心さまねしひさかたの天のしぐれの流れあふ見れば

(巻一・八二)

海の底沖つ白波竜田山いつか越えなむ妹があたり見む

(巻一・八三)

万葉集卷十・二二三四「しぐれ降る見ゆ」について(上森)

右の二首は、今案ふるに御井にして作るに似ず。けだし、当時に誦める古歌か。

大伴宿禰家持が紀女郎に報へ贈る歌一首

ひさかたの雨の降る日をただひとり山辺に居ればいぶせかりけり
(巻四・七六九)

九月のしぐれの雨の山霧のいぶせき我が胸誰を見は止まむ

(巻十・二二六三)

八二の歌について村田正博氏は、

万葉人は「しぐれ」をうたうばあいには、大きく言って二つの方法をもっていたようである。その一つは(中略)黄葉の色を深めたり、散らしたりするものとしてしぐれをうたう方法であり、もう一つは、(中略)しぐれにつけて配偶者と離れてあるわびしさをうたう方法である。当然のなりゆきとして、おおむね、前者は季節歌のものであり、後者は羈旅歌に多く見出されるという傾向をもつ。

と述べられ、後者の方法によるものとされた。また、七六九・二二六三の歌は「いぶせし」といっており、恋人に逢えず晴れとしない気持ちと雨やしぐれと関係させている。

これらの歌をみると、しぐれが降るのを見ることがによりわびしさを表していると考えられることもできる。しかし、これらの歌と二二三四の歌では、その状況が異なっているのではな

いかと思われるのである。

八二は、愛する人と離れている旅愁を託したものであり、空を流れるように降るしぐれを見ている。また、七六九は雨に降りこめられているものであり、二二六三は序詞として用いているものである。これに対して、二二三四は妹があたりに降るしぐれを見ているのであり、妹があたりを見ることのできる距離にいることになる。それならば、「一日にも千重にしくしく我が恋ふる妹」なのであるから、濡れてでも逢いに行くというのが自然であろう。しかし、逢いには行かず見ているだけなのは、逢いに行けない事情があるか、雨に降りこめられたと嘆く歌であるということになる。その場合、なぜ見る対象が空を流れるしぐれや自分の家の周囲に降るしぐれではなく、妹があたりに降るしぐれと限定するのであろうか。

また、妹があたりにしぐれが降るのを見るのであれば、作者はどこから見ているのが問題になると思われる。山本氏は、集中に「妹があたり」は一五例あり八例が「見る」対象として歌われていることを指摘し、いわゆる「国見の望郷歌」の伝統に連なるものであるとされた上で、

外出をして見晴らしの良い、もしくは見通しの利く場所に出で立たないかぎり、「妹があたり」を「見る」ことなどできはしない。このことは「国見の望郷歌」の表現にとっ

て当然の前提である。

と述べられている。あるいは、「妹があたり」が見える位置に作者の家があるということなのであろうか。しかし、その場合も単にしぐれというのではなく、妹があたりに降るしぐれと限定する理由が問題となる

このように「しぐれ降る見ゆ」とした場合でも、決して明解な歌とはいえないと考えられるのであり、特に「妹があたりに」と限定していることの解釈に問題が残るといえよう。

五

第五句の本文については、山本氏のいわれるように誤字説は避けるのが原則であろう。問題は、妹があたりにしぐれが降ることを望み、それを見ようと思う理由である。雨やしぐれが降る様を見たいという歌は他にはみられない。やはり見る対象はしぐれではなく妹があたりとすることが妥当であろうと思われる。では何故、妹があたりにしぐれが降ることを望むのか。

妹や妹があたりを見る、あるいは見たいという歌の中に、妹の姿を隠すものがあるために見えないと詠む歌がある。

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の

歌二首 并せて短歌

：肝向かふ 心を痛み 思ひつつ かへり見すれど 大船
の 渡の山の もみち葉の散りのまがひに 妹が袖 さや
にも見えず： (巻二・一三三)

反歌二首

青駒が足掻きを速み雲居にそ妹があたりを過ぎて来にける
へ一に云う、「あたりは隠り来にける」(巻二・一三六)

秋山に落つるもみち葉しましくはな散りまがひそ妹があた
り見む へ一に云う、「散りなまがひそ」(巻二・一三七)

一三五の長歌では、黄葉が散り乱れて妹の袖がはつきり見え
ないと嘆いている。そして一三七の反歌では、散る黄葉よしば
らくは散り乱れてくれるな、妹のあたりを見たいと懇願してい
るのである。このように、見る対象を隠すものに対して懇願す
る歌は他に次のようなものがある。

娘子らが放りの髪を木綿の山雲なたなびき家のあたり見む

(巻七・二二四)

蘆城山木末ことごと明日よりはなびきてありこそ妹があた
り見む (巻十二・三一五)

そして、さらに見たいという願望が強くなると、命令する歌
となる。

：夏草の 思ひしなえて 惚ふらむ 妹が門見む なびけ
この山 (巻二・一三一)

万葉集卷十・二三三四「しぐれ降る見ゆ」について(上森)

一三一は一三五と同じ題詞の長歌であり、人麻呂の作である。
二二三四の歌はこの一三一と同じ発想の歌ではなからうか。つ
まり、「妹があたりにしぐれ降れ」というのは、妹を隠すもの
を除いてくれと命令しているのではなからうかと考える。

これらの歌では、見る対象を隠すものとして山や雲があった
が、特に梢や黄葉があることに注目したい。人麻呂は一三二の
反歌で、

石見のや高角山の木の問より我が振る袖を妹見つらむか

(巻二・一三二)

とも詠み、木々が自分の振る袖を妹の目から隠さないかを心配
している。

このように、木々、梢、木の葉が、恋人を隠すものとして詠
まれているが、一方、しぐれは、その木の葉を黄葉させ散らせ
るものとして詠まれている。

さ雄鹿の心相思ふ秋萩のしぐれの降るに散らくし惜しも

(巻十・二〇九四、人麻呂歌集)

朝露にほひそめたる秋山にしぐれな降りそあり渡るがね

(巻十・二二七九、人麻呂歌集)

九月のしぐれの雨に濡れ通り春日の山は色付きにけり

(巻十・二二八〇)

しぐれの雨間なくし降れば真木の葉も争ひかねて色付きに

けり

(巻十・二一九六)

さ夜ふけてしぐれな降りそ秋萩の本葉の黄葉散らまく惜し
も

(巻十・二二一五)

君が家の黄葉は早く散りにけりしぐれの雨に濡れにけらし
も

(巻十・二二一七)

つまり、「妹があたりにしぐれ降れ」というのは、しぐれが降ることにより、木の葉あるいは黄葉を散らし、木の枝だけにして欲しい。そうすれば、木の間から妹の姿を見ることができると考え、発せられた表現なのである。そして、そのように考えると、しぐれの降る場所を妹があたりと限定していることも理解しやすい。この場合、木の葉が落ちれば実際に妹の姿などが見えるようになるかは問題ではない。作者は「一日にも千重にしくしく我が恋ふる妹」の姿を見たいと懇願しているのである。しかし、妹の家は木々で隠されている。そこで木の葉さえなければ見えるかもしれないと思い、しぐれよ降れと歌っているのである。この歌は、しぐれが木の葉を黄葉させ、散らせるものであるという前提のもとに詠んでいるため、理解しにくい表現となったものであると考える。

ただし、「しぐれ降れ見む」とする場合、表記の問題があった。二二三四を略体歌と考えると、命令形の語尾を「礼」と表記していることが異例となるのである。この問題について山本

氏は、正訓字に加えて動詞の活用語尾が文字化されているものとして、略体歌一例、非略体歌二例をあげられている。

奥藻 隠障へかくさふ浪 五百重浪 千重敷く 恋渡鴨

(巻十一・二四三七)

一年遍 七夕耳 相人之 恋毛不過者 夜深往久へゆく

毛 (巻十一・二〇三二)

新室 蹈静子之 手玉鳴裳 玉如 所照公乎 内等白世
へまうせ (巻十一・二三三二)

そして、二三五二の「内等白世」は命じていることを示すために表記したのであり、二二三四の「零礼」も同様に誤訓を排除し正統な訓を確保するために必要不可欠な表記であった。それは略体・非略体という書式の差にかかわらずなく使用され得ると考えてよいだろうと述べられた。

二三五二は非略体歌であるので、語尾の「世」を表記するのは自然なことである。したがって、略体歌と考えられる二二三四と同様に考えることはできない。しかし、「礼」の表記がなければ命令形に訓むことが難しいのも事実であろう。二四三七のように略体歌であっても「隠障」と表記している例がある。ここは命令であることを示すために表記されたものであると考える。

また、しぐれと黄葉の関係であるが、村田氏がしぐれを詠む

万葉歌は大きく二類に分かれることを指摘されていた。内田賢徳氏はそれを支持され、黄葉との相関関係においてある季節歌風の類と愛する人と離れてある旅愁を託す羈旅風とがあるとされた上で、二三四を後者の類に属する歌とし、最も早い例とされている。そして、黄葉を詠まない一七六〇、二二二七、三三二四をあげ、三三三四は少なくとも寧楽宮遷都以前といえること、また黄葉としぐれを隣接するのみである四三二より古いと考えられることなどから、

八二番歌（和銅五）と二三四番歌（人麻呂歌集略体歌）

が黄葉を詠まないことは、しぐれと黄葉を隣接的に並置することより古い傾向に属すると見られてよいと考えられる。と述べられており、二三四に黄葉という要素はなく、しぐれと黄葉を関係させる歌と比べるとより古い歌と考えられている。しかし、一方、黄葉との相関を示す歌のうち、早い例は次の二首であろうとして、本稿で既にあげた卷十・二〇九四、二二七九の歌を示され、

二首とも人麻呂歌集非略体歌に属する。この両者で、しぐれが黄葉を残うものとして忌避されていることには注意しとよい。しぐれと黄葉の相関の初期は、まずこのあり方においてあったとすべきであろう。

と述べられた上で、しぐれを嘆くことと並行する形で、黄葉を

万葉集卷十・二二三四「しぐれ降る見ゆ」について（上森）

促すものとしてしぐれを嘉することは新しく興った傾向であると考えられるとされている。

内田氏は、人麻呂歌集の歌であることにより二〇九四・二二七九を早い例とされている。しかし、二三四も人麻呂歌集の歌であり、本稿で述べたようにしぐれと黄葉との関係を前提に詠まれたものであるとすれば、二〇九四・二二七九と同じくしぐれが黄葉を散らせるものとして詠まれた早い例ということになろう。そして、この考えが正しいとすれば、二三四で「しぐれ降れ」といっているのは、木の葉を黄葉させるのではなく、人麻呂が一三五で散る黄葉で妹の袖がはつきり見えないと詠んでいるように、黄葉が妹の姿を隠しているのであり、それを散らせてしまってくれと願っているのであると考えられるのである。

六

以上、二三四の歌の本文と訓及び解釈について考察してきたが、「しぐれ降れ見む」では歌意を得ないといわれるものの、「しぐれ降る見ゆ」でも明解とはいえず、特に妹があたりに降るしぐれを見ると場所を限定していることに問題がある。そして、このように、妹があたりにと限定するのは、見る対象は

「妹」なのであり、その「妹」を隠す黄葉を散らせるために「しぐれ降れ」といつているのである。この歌には「黄葉」を意味する語が用いられておらず、そのため明解でない表現となっているが、しぐれは黄葉を散らせるものであることを踏まえた上での省略なのである。一二三四の歌は、このように解釈することが最も妥当であると考えられる。

注

- (1) 歌の引用は、特に注がない場合新編古典全集による。
- (2) 「万葉集卷十・二三三四歌（人麻呂歌集歌）について」妹があたりはしぐれ降れ見む」『国学院雑誌』一〇二卷六号、二〇〇一年六月。以下山本氏の説の引用は同論文による。
- (3) 「長田王の歌」『万葉集を学ぶ』第一集、有斐閣、一九七七年二月。
- (4) 「萬葉しぐれ考」『ことばとことのは』一〇号、一九九三年十二月

（かみもり てつや・流通科学大学教授）